



繪本  
西村物語  
一

~ 13  
3300  
1



13  
3300  
1

喜怒哀樂可以勸善  
可以懲惡

# 繪本田村物語

大坂 三木書樓梓

## 田村物語自叙

夫聖經賢傳皆是載道立教之書誠萬世之所取法也。如其餘諸子既不免有差況小說野史鄙俚駁雜之書乎。然伊川程子曰人各有所長能取其所長皆可用也。然則雖諸雜書亦有不可盡廢者。予戲論童蒙將以禍福善惡報應影響之理若其小童順賴之則其於教誨豈為無小補乎。由是採續日本記前今太平記元亨釋書王代一覽及謠曲等之數書以雜

天正十八年九月  
本大學出版部

出杜撰戲文間亦加畫圖而欲無厭見分書目以爲  
 一十輯而爲一編命曰田村物語庶乎便於閱市求  
 雜書頑童云爾

文化已巳春日

武關 川上 鯉翁 書



凡例

○此全編ハ正說野說ヲ論ゼズ。モト空言ニシテ偶實事ヲ交出スト雖其  
 二三ヲ信ズベカラス。譬ハ桓武帝ノ治世二十四年ニシテ奈良ノ帝ノ御  
 宇ニウツレルハ正說ナリ。桓武ノ治世延暦九年ノ間ノ事ハ物々先  
 後ノ違アルハ。モトヨリ其實ニ拘ラザル所以ナリ。餘ハ推テ知ベシ。  
 ○親戚官職姓名等ノ如キ仮ニ名ツケモウケタルモアリ。或ハ寶貨器用  
 衣服等ニ至ルマデ。今ヲ以テ古ニ宛ルノ類多ク。又ハ支ニノヅンテ事跡モ  
 符合セザルノ如キハ總テ兒童ノヒタスラ心ニ面白ク。然レ耳底ニ入易  
 ヲ要トシテ著述セルナレハ閱者考正シテ嫌疑シ玉フ一ナカク。畫圖  
 モ亦然ナリ。  
 ○此昏ノ文字ハ正字偽字ヲ論ゼズ。和俗ニシテカウテ童蒙ノ見易キヲ  
 祿シ。假名モ亦五音ノ正キニ拘ラザルハ由來戲作ノ書ナレバナリ。將  
 此舛稿ヲ石友ニアタヘテ書寫セルナレバ吾著ストコロノ意ニタガフ

コトハアラザレ氏。艸稿ノ國字ニ比セバ少シク違トヨロモアラシカナレド。  
 只此編ハ專ラ積不善ノ人モ時トシテ盛ニ積善ノ人モ折ニラレテ衰  
 ルトアルハ畢竟首尾照應シテ見ル時ハ天命終ニノガレザル所ヲ知ベシ。  
 ○此各ヲ編録セル所ノ微意ハ人各七情ノ爲ニ私スルトモセザルトノ二ツニ  
 止テ勸善懲惡ノ意ニモトヅクナレハ舊博學前輩ノ人ノ年々歳々  
 屢アラハス群書ニモルトナシト雖タトヘハ勸善懲惡ハナラ食ノ如  
 シ。須更食ニアケル人アラシニ豈因茲食ヲ廢ベケンヤ由是更ニ贅  
 言ヲモ厭トナク。戲文ニモ善惡ノ行ヲアラワシテ。性善ノ心鏡ニ照サ  
 シメントヲ欲ス然トモ古人有言校書如風葉塵埃隨掃隨有ト宜  
 哉此言也况吾曹陋識ノ編輯ヲヤ諸君子ツノ拙ヲ罪スルトナカレ  
 ト爾云。

武關川上 鯉老人識

明而不昧  
公而無私  
壯而不怯



田村麻呂之像善

おろしつゝ  
やくと悲しむ

鶴舟うね

芭蕉

弓木甲斐守照門之像

後隠形鬼毒丸

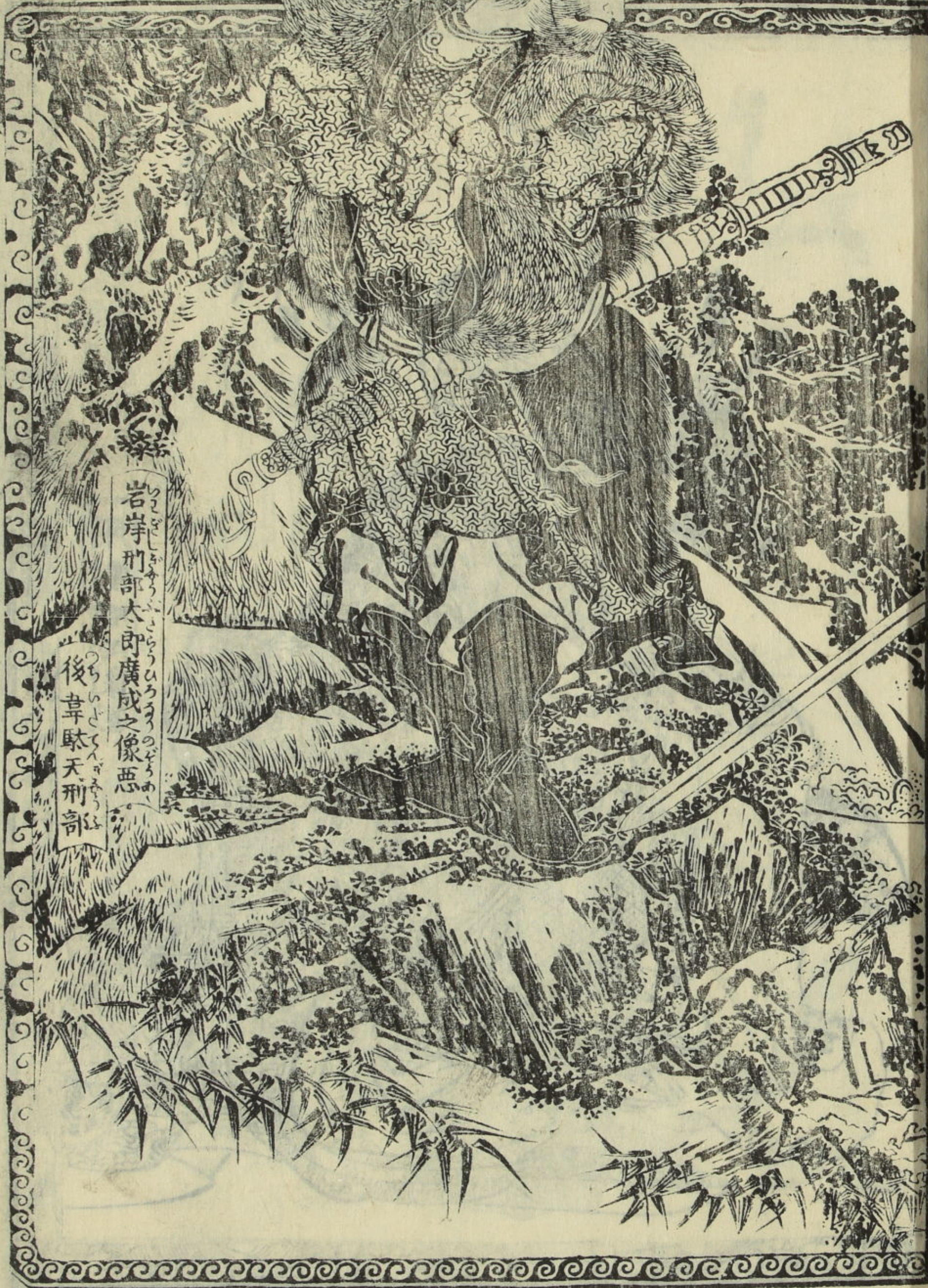


起不義之心  
動邪媯之念  
神明皆知

照門室白波之像



呼雲起風  
降火而惑  
愚夫屢好  
殺人而積  
惡不休天  
道豈無罰



岩岸刑部大即廣成之像惡

後幸賦天刑奇

隱と  
家ヤ  
よめ  
菜の  
中よ  
残る  
葉  
嵐雪

白鶴翁之像善



關正市正秀之像善



振々柳之所  
以立切



えん所

おろしや

乙川橋

乙川

月雪姫之像善



日本外傳

日本外傳

田村物語總目錄

卷之壹

○第一回 御狩の武備 ○第二回 秋夜の列星

卷之貳

○第三回 觀音の告 ○第四回 異石の能

卷之參

○第五回 名家の災 ○第六回 忍夜の珍事

卷之四

○第七回 惡報の緒 ○第八回 白鷹の便

卷之五

○第九回 武門の花 ○第十回 忠孝の餘慶

通計十回目次畢

復讐 田村物語卷之一

武關 川上 鯉老 人編輯

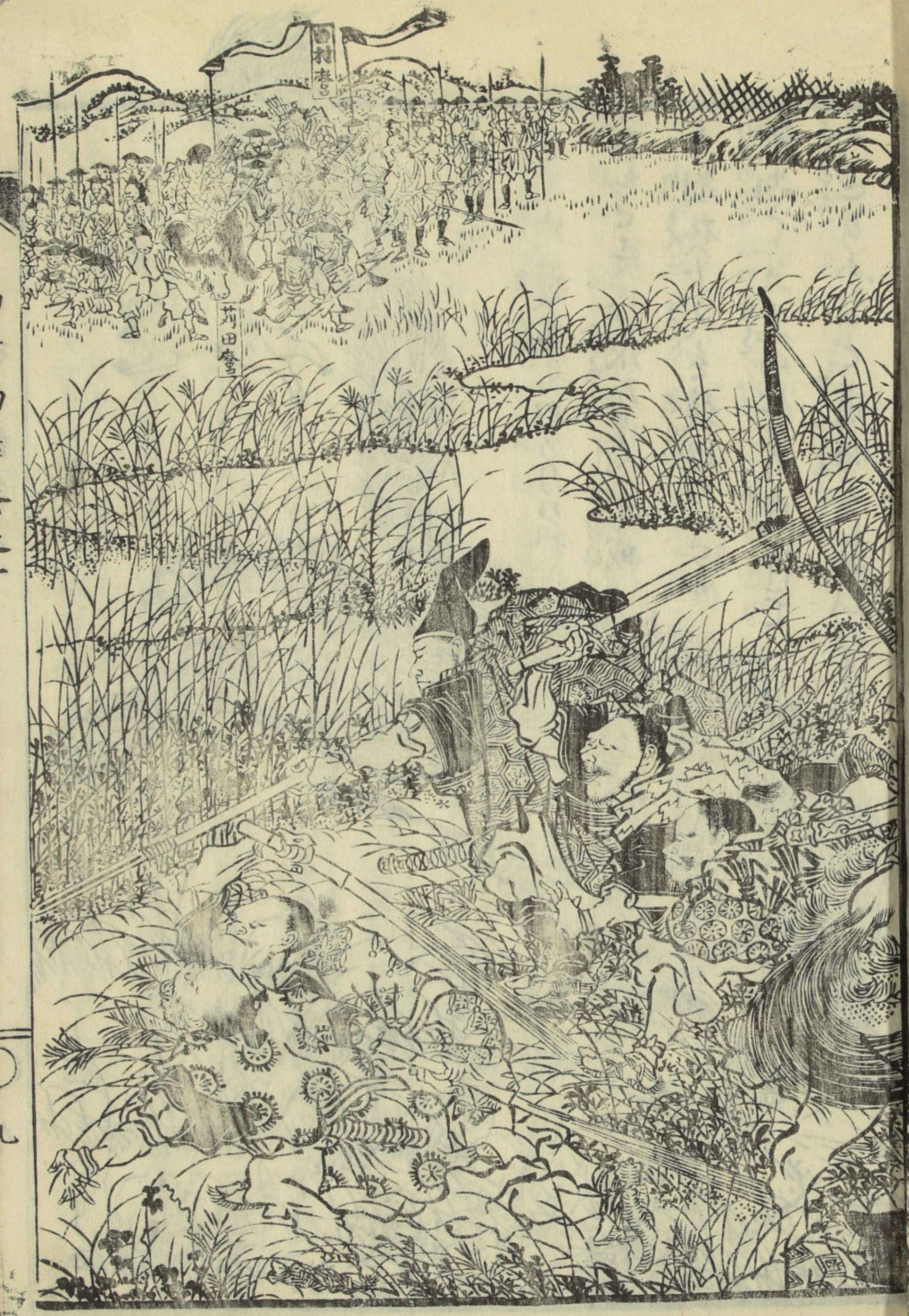
第一回 御狩の武備

傳聞人皇四十九代の帝光仁天皇と中奉の天智天皇の孫  
施基の皇子の御子なり。御在位十二年。御壽七十三あり。崩  
たす。光仁帝は太子山部親王天應元年四月寶祚を受嗣す。御  
即位の大禮行はれ相武天皇とこれなり。御弟早良親王と太子  
と定まらる。御母と高野夫人と中奉は高野の乙継の女也。天皇  
人と形り寛仁にみははる。能民の父母とこれ御公法か。目郷  
雲容おのく其職を守り。人臣の道正しく目出度かりけれ



御時なり。然るに故ありて山城國愛宕郡宇多の邑小平安城  
 を興基ありて同國乙訓郡長岡の都より延暦十三年十月廿一日  
 遷都のりけり。後高倉の院治承四年六月三日平清盛幼主を奉りて都を遷す  
 天皇常武備の助ともなれど遊獵を好み多ひされど遷  
 都のみより所これ地勢風景亦も法遊覽のり同十二月小倉山小  
 早良太子と俱に御幸ありて鹿狩ありけり。此頃小倉の野山狩に猪鹿のり  
 眺望いと珍なり。眞信公が小倉山子の紅葉とよらるもこれなり。御狩の儀伎美  
 志く冬ありしけり。出立教百の駿馬の嘶と山彦み言れ鷹と居犬  
 を牽て郊外小満くたる。比も暮冬の空寒く立けり森の此方  
 小織金の御旗と日に映て彩雲をほ。素錦の御幕と風  
 帯て白浪をたし。其外色々の御旌旗風み舞り。諸將乃隊伍

嚴し。紅紫以り花を飾とれはと。時あはれ春ふめ  
 が如し。此日右大臣藤原の是公中納言藤原種継從三位右衛門督  
 坂上の前田磨其御子田村磨その外弓木甲斐守照門弓削の大進  
 國房大伴貞純同高貫等も供奉せられ。時刻至りて御持始  
 の御合圖の太鼓を打りせば教万の勢子一時み声を合せる  
 極こそあれ百千の雷も足り過とおぼえ。おびおしくほとも  
 なく。林のありて峽より猪鹿兔の類を教多狩せし。南北より  
 東西より矢廻れを我おとす。引て射伏せ馬も小突苗或を  
 岩根より追けられ鹿兔の類を組留と生ごらるもありていと興  
 ありけれ。天皇も兔二ツ鹿一ツ射止ありて歡喜ことに潤へり。  
 俱に興入りせり。早良太子と朝生とれより花鹿みりて立



新い老子馬子  
孤門木

早更太子

弓木照門



あふきて  
も。御獲物もあつりたれ  
むらこまらふ求たきも或  
と射換。又と後迎のかこめ  
獸也。又先のたより悪くして  
打さるるなど遺恨をかりひたす

ごもせんごんごんいふ折しもられ。金毛粉面  
の老狐二つの子狐ととも西の方おれ麓より狩  
出され。天皇の御馬前をたお過りて走り行を勢子へ  
道にじと取擁。天皇の御後お招かれ。木照門へ已が  
手柄おせん。と原不祥生なれば。馬前おま好さ。白重藤の  
弓と満月お引ち。あつり。これ射老狐と我子狐を射。てたよりあえ  
右お驚れ。千くに走廻り擁。道とんとすれ。も前。逆末を設け。後と  
勢子お追はめられ。道お二つの子狐を四足の中にかこひ。と  
照門の方お向ひ。手合。とる。如く。して。う。げ。く。れ。を。得。る。と。照門が  
兵と切。放つ。矢。あ。や。ま。こ。ば。老狐のたれ。眼。より。肩。先。う。けて。矢。尻。白く  
貫。け。ば。四。足。を。空。よ。ほ。し。転。轉。反。倒。と。苦。し。こ。つ。れ。が。は。と。踊。り。上。り。と。恨。め

ちび母照門が方々急度うり向ふ顔色眼より血を流して粉面忽  
 紅み赤し「白こ齒をじき出」襟の毛逆よま怒りたのり流石  
 邪悪豪氣の照門もあつど能の毛も赤堅ばりなり。子狐をまき  
 驚た八方へ逃走れを老狐を一箭を帯なりも猶子狐の行方へ欠  
 迷めて次第ふよるて行を早良太子と父君あ似玉つと御と為ま  
 不仁ふあせまれが今朝よりけ獲物なれを竊よ憤りあ折られ  
 馬次進りて手負つた老狐を逃じと只一箭小射あせまひるあぞ  
 照門こと死えと又子狐追進みちれ小一の子狐は終中逆水と  
 越て走り残れ一正の子狐あまりに強く追と東の郊原又屯しお  
 えり坂上の野田麻呂の御子田村磨父君の傍より箭をまき  
 まるひちられ後への方あぞ逃隠とられ抑此田村磨とやとる年

漸十四果眉目清らうしてあつも廉直謹素の御生質おれハ父  
 野田磨の慈と大さなれ此日天皇小御顔ありて田村磨を御  
 あつれなり後小文納言に昇進右大將を兼あひて禁中を守護  
 たりしを此公なり。かくて田村磨と小狐のあはれはあつ顧  
 めし甲の元誓を以て子狐の四足の間あし入。かゝこの外あし  
 中り多入。子狐を憎も枯斬れ斗水を得困鳥の森あつたあつ  
 あつ。又あつく東方はして逃去り。天皇是を御覽ありて馬  
 を進められ何故と小狐を放らりけれと不審ありれば田村磨  
 急ぎ進み出地上より剛くれ涙を浮めてやそれたへ今日しも御侍乃  
 心事なれば免さぶさあはあつたあつ。いふせん親狐を子の為あつ  
 引とて走れ小速なれ。つひ千年の命次夫の下に落せれ有ま。

先程より遠目お打守て詠め居られた。其愛憎の至とれたことありて  
かた人の親の子やありぬの横とらたことと存くべからず。子狐を其  
修め放らかりぬへも御狩の心場を殺生を厭ふめを非ぞ。非不審  
火業りのくは。回答をなれられたるものほしとぞ。入言上り  
及ぶれた。仁心至孝。面々顯して見えへられた。流石と新田磨の御  
子なりけり。諸人横と打と驚嘆せぬも好りけり。天皇も御  
涙の露うかして。実も御と尋ねの形としてやじくもひけるもの  
かた。御感嘆は。常に愛し。所の白雲と名号  
白鷹を。當座の御褒美として。田村磨へ。自らあり。父新田磨を  
御覽じて。いふや。汝。教年の忠勤。神も。吐ひられた。仁孝の  
子。汝。設く。坂上の名家。汝。坊。繁榮なる。は。從。田村磨

か生を教諭せよと宜ひて御馬をわく。坂上御父子を地  
上。御伏て。いふ。人。なれ。御。こと。の。有。か。は。な。れ。ふ  
と。理。よ。そ。入。ふ。な。れ。去。程。不。夕。陽。西。白。け。て。冬。の。日。け。い。と。短  
く。時。ふ。通。入。鳥。を。暮。行。遠。寺。の。鐘。不。送。れ。州。本。自。返。景。の。風。に  
彫。心。人の。心。も。朝。と。進。ミ。夕。部。は。退。く。天然。一。氣。の。通。へ。ふ。ぞ。不  
の。是。公。頃。を。計。ア。御。駕。を。促。し。還。幸。は。し。ま。ば。早。良。太。子。を  
乙。の。矢。は。老。狐。を。射。あ。ふ。ま。む。と。い。と。不。興。氣。を。渡。り。ま。る。照。門  
も。老。狐。を。射。て。又。子。狐。を。追。行。既。少。射。苗。人と。せ。し。を。田。村。磨。放  
中。の。み。お。ふ。び。却。り。天。皇。の。御。感。ま。め。が。ひ。を。知。く。は。御。狩。場。お。て  
諸。人。自。の。恩。賜。わ。り。諸。人。の。美。望。は。わ。り。し。と。そ。い。と。に。腹。は。な  
こと。お。り。と。已。が。邪。欲。お。引。な。れ。是。より。竊。に。鎌。を。結。び。る。と。て。

爰こゝ又また中なかつ納な言ことば藤ふじ原の種こゝろ繼ついで御み二ふた人にの御み子このりを満み子こ代よ  
 とて十六歳むねとせ成なりて御み妹い月つき雪ゆき姫ひめとて十四歳とせじゅうし成なりて天あまの生なる  
 麗うつくしくた御み質しつ風かぜ流なが閑ひら雅みやびと假かりの化ま粧じゆを待まちたらばば海うみ棠たうの花はな徒たひ  
 て春はる雨あめは浴あびして垂た柳やなぎの緑きぬ嫩なくて東あづま風かぜふ靡なびしては一ひと度たび微こ笑わら  
 とは百ひゃくの媚めいを生なじて六む宮みやうの粉こな黛たい顔かほ色いろが如ごとくは西さい施しが顔かほ衣え通とほが姿すがた  
 とはいふとも耻はぢぢをなりしれは御み生なれはあら其その清きよ公こうははやはじく歌うたの道みち  
 へはいふなりし。琴こと書しよ又またと機織はたかとももも字あひ得えあらひしれは父ちち  
 種こゝろ繼ついで御み日ひ夜や袖そでの中なかには珊さん瑚この玉たま掌てのひらの上うへには芙ふ蓉じゆうの花はな也なり御み  
 慈あはれみ限かぎりなかりけりて満みち千ち代よ君きみとは之この歳としの時とき母はは上のぼりしりしるは御み  
 月つき雪ゆき姫ひめへ今いまの側室たはらひ白しろ菊きくとは之この女むすめの産うれ所ところなりし。白しろ菜なを麗うつくし  
 姿すがた世よ也なり双ふたかかりけりし。去いるも公こう直ちか也なりして二ふた心こゝろなくは君きみおははえしるは御み也なり

去い年としの冬ふゆ御み狩かりの折をりには種こゝろ繼ついで御みも供とも奉ほうせしれは田い村むら森もりの  
 仁に孝かう也なりして珠たま也なり清きよらりなれ生なるはとももも父ちちの薊あざ田た薈かいも老らふ實み小  
 ちちくち引ひ前まへの道みちに達たつせしるは事こととは世よ人ひとの知しれは所ところなりし。いふもも月つき雪ゆき  
 姫ひめを田い村むら薈かい小こ嫁よめ也なり。長ながくは一ひと家いへのよしとは以も結むすぐはんとは引ひ割わ国くに房ふさとは招  
 かかききくは深ふかくも思おもひしれは。國くに房ふさとは公こうとは得えるは薊あざ田た薈かいよは妻い細  
 以も語ことばるは。薊あざ田た薈かいも歡よろこびたましひし。早はや速すみには美み引ひありて万まん事じ整ととの  
 ひは吉きち辰しんを撰えらんで納い采さいとは送おくられは去いとも田い村むら薈かい由よし事じ  
 漸あ十五ご歳さいなれはは。月つき雪ゆき姫ひめの入い襲しやうとはなりましれは。兩りゆう家け縁えんとは結むす  
 せしては後のちとは知しれは。出い會あひしるは常つねはは音ね信しん以も通とほせしれは。一ひと言ことば三さん忌  
 形かたちとはあらけしれは。かかくは光ひかり陰かげ流なが水みづのととく。星せい霜しも早はやくも。延の替か  
 十六じゅうろく年ねん月つき雪ゆき姫ひめとは二ふた八はちの春はるとは迎むかひしるは。二ふた月つきももはは生なるは空そらもも半

なりしに。立並ぶ御園の花本を争ひ奪けて。天も花を酔ひ  
と。その景色たとえんがな。樂波寄れ池の面と旅も遠く。山吹  
のかげに浸して金の水は源やあふれ。技も馴深鶯の声と和ぐ  
風のさそとささひ。花らぶ小蝶の舞も更行春の嬉りたおれぬ。  
此折から月雪姫を多くれ居左右人もみかへれ御園ふいで  
多ひこ。そとよまのよと。花を弄ひまあ。あと古人の哥とよひ出ひ。  
短冊が持たれぬのけは。左右人も意を料紙を揃へよ。まふ。  
打笑まひ玉まとのぞき。

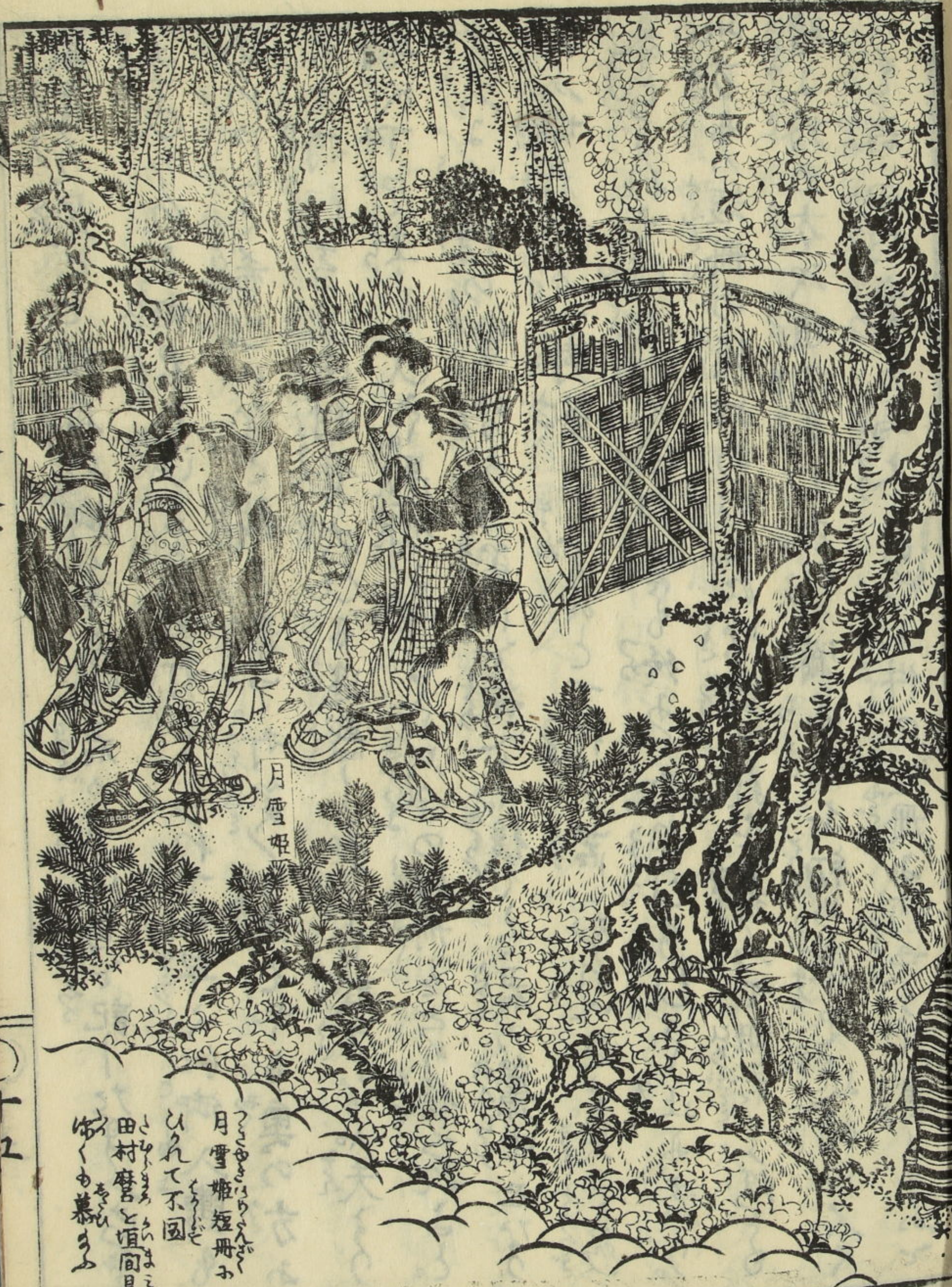
山はく霞のまよりのほのづも

と。いともうれそまう書とまふ折ら。春風のささひもて短冊  
を吹拂ひ裏と見え表と翻つ。まふと。と西の方なる庭の

堀のあおこみ落散と見えしが。かこみは此日田村磨満ふ代乃  
両公會合もひく。ろもれぶと。近侍の人くとまもに射御の術は  
宗びて居もひしが。件のこみま。田村磨の御も馬の鬣の辺りも。  
止りたれを何公なく取わけえまふ。山裾かまも。のまよりのほのづも。  
と墨々清く歌の半記したる。あぞ打笑まひく。奥ふまふし馬上  
ながみ腰なれ矢立の筆が技とりて。

えんしし人こそまひのりまれ

と下の句と書送りまひる。附近侍一人いそがしく走りまて。その  
短冊とことなまよりの吹ちりひん。洗返しむりのへとて。双手とに  
出せむ。田村磨日らやまよ我戯も下の句記。既も反右し。は  
くれむ。需も随ひがじと打笑まふを。あ形も興ふ乗じ。書ひ



月雪姫

月雪姫短冊  
 ひらて不図  
 田村磨と垣間見  
 ぬくも暮る

満十代



田村磨



取まのり。足こそ姫君の御筆。めて君が下の句と記したまふらむ  
 幸ひなれむ。姫君の清く流るる打らうられての。早くに御入樂も  
 あれけしと希ひのなご戯と奉て打笑く。足むや母奥の方か  
 ちと持行ちり。田村磨太ひみ迷惑しむ人も詮方なく。夫より  
 馬下下てまゝしひと。是彼は仰せと只今の短冊ととり捨られよと。  
 宣ふは近侍の輩。皆うら笑はと揃へ。後こそ君の簾中となり  
 あふ姫君の方へ。御筆の糸のりゆとて何え苦しかれべと。更よ次  
 奉らざれむ。流かなく田村磨も終あ打笑ひまひと止むあり。  
 此方かへ短冊の塚れあ形とに吹散とれを慕めて。姫君を流とも  
 暗く外の方垣垣見てもれば。満ち代を初め奉て近侍の人々  
 らら群田村磨と馬上よあつと。件の短冊何中へ入書とまふと

姫君と稀ふ對面とあふ人もおもむゆられむ此折るはきりくと  
 あふふ面と美玉のおとく目秀眉清らうに威あつて猛らざる姿  
 に月雪姫のほろろ忽脱臆として短冊の奉も打忘れたまふ。余  
 念なくえとれ居多ひりれ。中に伶俐左右人春雨とりてれ心  
 ありて早くも件の短冊と取えしえとあれは墨色とえ妙よ下  
 の句とまじりありけしは。其ま姫君の御前ふはうて只いまもえ  
 たまふ如く。かた秀時君小紅糸と結びあふと姫君の傍侍餘り  
 のおのころ。不圖も下の句と書ひひたれおの公とかりとふとせ  
 をかけて御夫婦のほ睦ぶれ例なるべしと。短冊と奉てけしは。お  
 と空小月雪の花れ又添紅の顔ら覆ひまひりれが。中にお  
 是え。日夜おのひの媒とぞなりにまひり。かくて秋の半過ゆく此

月雪姫の公地例なる病の床小臥柴の露おりげするあり  
さほ小上下氷心がれをなかりちりて

第二回 秋夜の列星

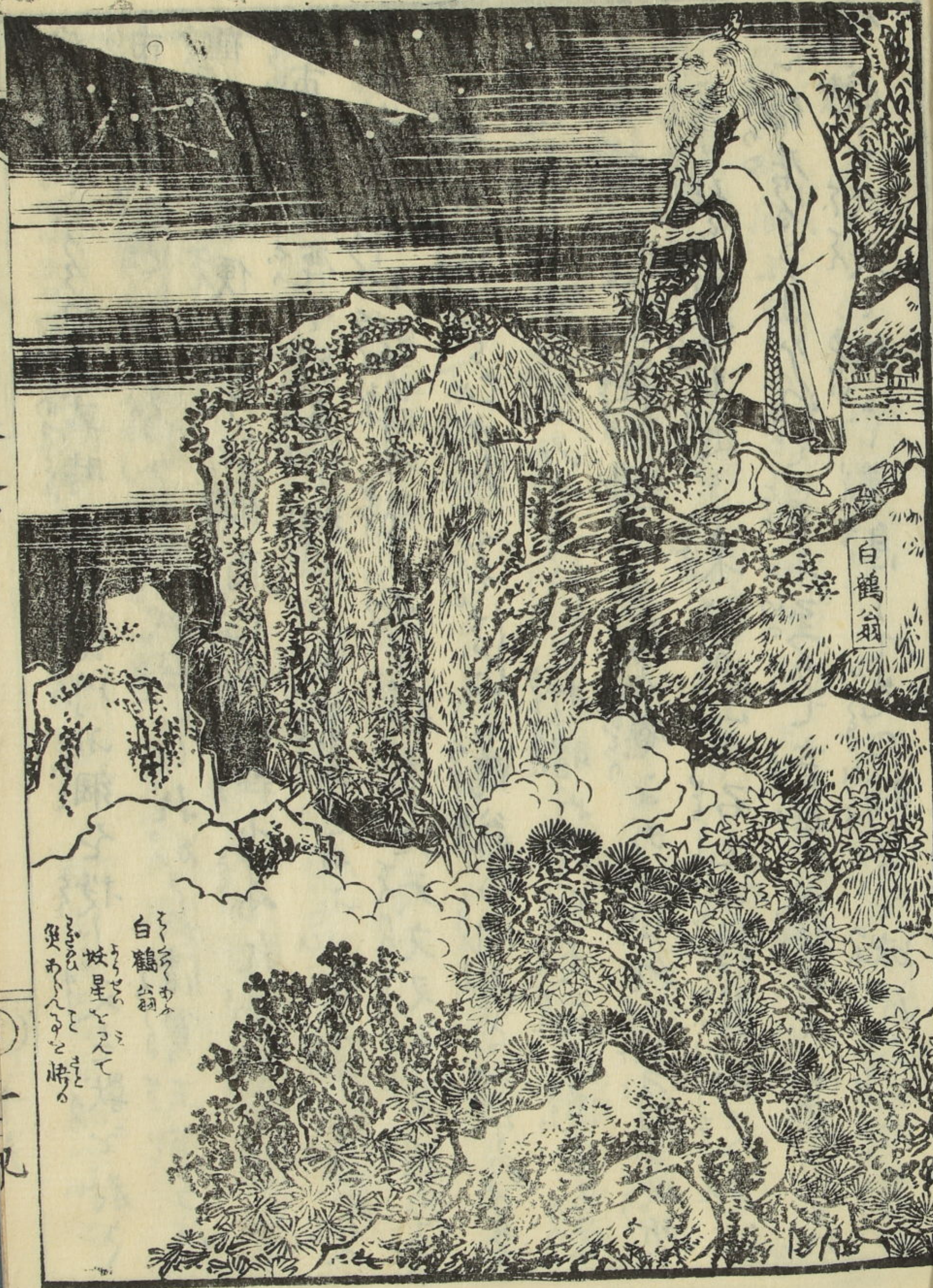
且説中納言藤原の種継卿も。月雪姫の病遷平愈しあり  
まじれを悲しみみみ。塩梅臣共うつを若しめけれがわると白糸と  
薄と氷と踏公地して各みたてれ困手の救診しをられ小醫論  
紛くして定てんは。かくてハ盡せぬるゆかりと。常に腹薬志あり  
の國多。濱田長立院といれりの良劑をよめせられとも日と重  
其證なかりしと。あは如何小せんと坂上家へも巨細よ告あせめ  
両家の使者馬駕籠の往来日夜小くえど。閨門向を珠はり小  
爰小三人彼所よ五人打寄竊小眉次響ひれどありなり。

爰小勢別筆捨山崎とわか。のか邊り小。白鶴翁といる異人あり。  
世塵のかははしれをとりて。山荘の燕居寂く。晨小浮雲  
の行傍をかりひ夕部小松風の音に唄く。益といへども南窓の  
りとに打眠り。夜更ととも書籍のうへ小眼を洗ふ。仙骨童  
顔はして。乾押を掌中に握り。鬼神不思議の術をひく。飄  
然として世に出れ。の表あれども。世の中の為小難波のよし  
次論せざ心成煉くぞ。光陰を送り。いれが。頃しも秋のすへ  
至りて。或夜空みどり。にら暗。宇宙風うして。列星文をほ  
いと静けき。傳ふ。白鶴翁を杖を石上よ曳く。高きに登り。  
京師のかを望む。帝星形大いし。してあつも光耀燦爛入り。  
其傍よ将星ありて。帝座を守護し。又将星あはれちる星

あり。故を小なれども。其光清き事。帝星も劣らざる。常は將  
 星も放ちし事なく。順ふ故をなせり。然るに北方より一の妖  
 星飛来す。彼小なれ星のうへに望むと見し。忽ち小星  
 と度々下る。數十度止して暫し。將星も光を止さる。  
 是ぞあやしむところ。所は件の妖星も捨却し。將星の座を  
 遠く。帝星の方へ共折しも。先は天変を落下し。小星又  
 金光とてうつて九天へ飛上り。妖星も越ると見え。妖星ハ  
 忽ち碎く。数千の青光となり。魔風もはきて。つらともなく  
 消失す。小星も九の座へ立上りて。光添増し。清らに。  
 鶴翁もつと杖を捨て嘆息し。嗚呼。天なれ。好命なる家  
 徳家の國君も災あり。道れざる。然れども災の後却く

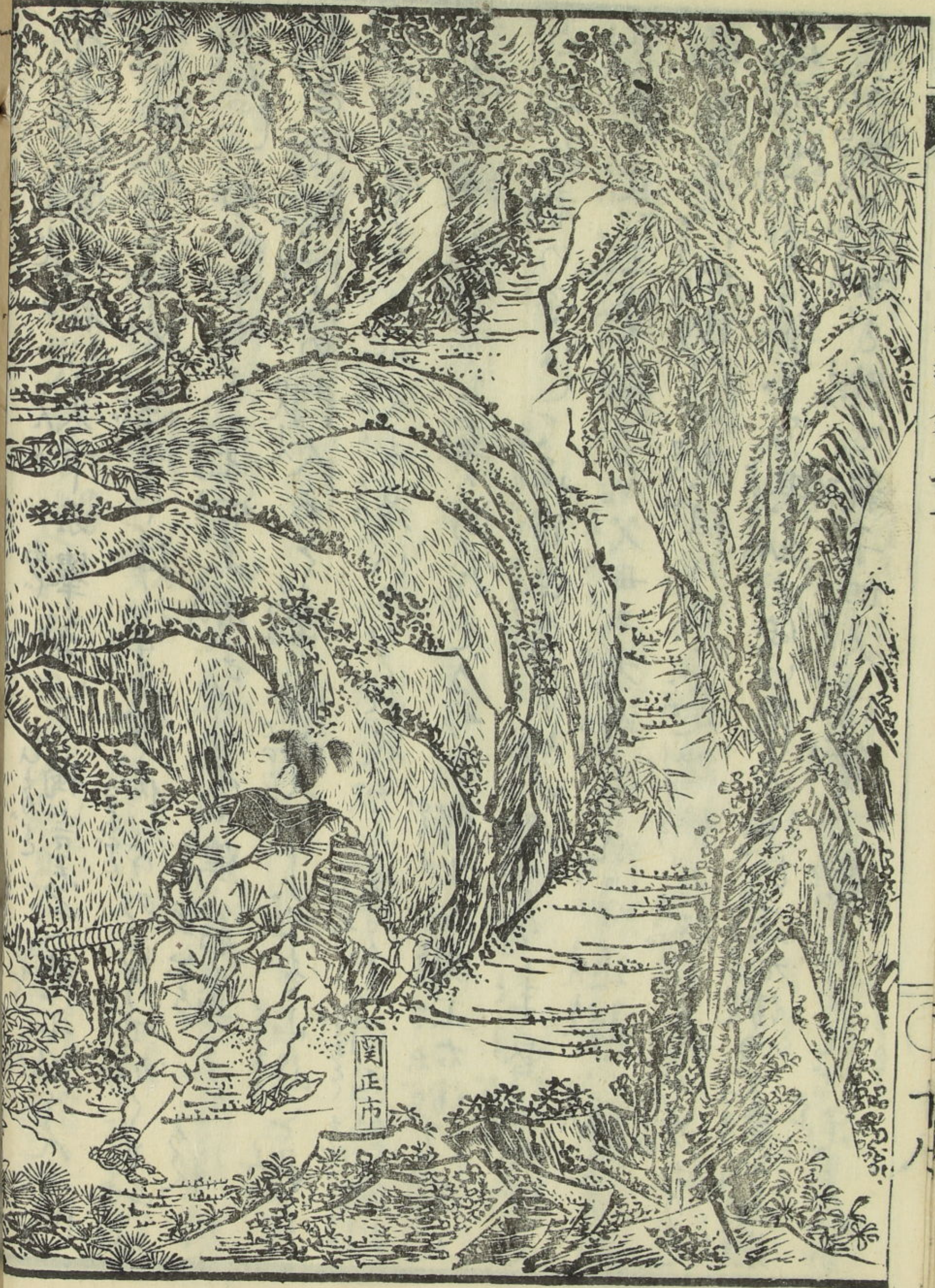
かるべ。賢人名と天下へ攀ぎしと。獨言きて。菴不ぬ人と世  
 徒をいへて。師父急なく。師もいへ。何ののありてかくまでハ  
 嘆息し。あのみやと。尋字ふ者あり。鶴翁驚きて。後以  
 顧む。我一人の門人あり。常に此人なぐ。山莊を尋ね  
 人もなかり。此人を是いふ。なれ人ぞと。尋ねる。同國鈴鹿川  
 の溜み。細と煙りも立り。れと。郷士也。関正右衛門。正父  
 といふ。其者の子は。正市正秀といふ。都なり。年十六はて  
 究む。其生質正しく。父母も孝順なれ。近村に誰か。ね  
 者も。右衛門が先祖なり。是諸侯の孫。其が故ありて  
 民間へ下りけし。其公は。いやし。正右衛門が妻を。柴  
 と云。娘を乙女と呼て。親子四人。清貧も暮し。けれ。定り。家

日本書紀卷之十一



白鶴翁

白鶴翁  
 杖星と入て  
 災を人々に降す



關正市

家業うちわざもなつれど。或時あるときと鈴鹿川すずかがはの細あせを投なぐ。又またを獸けものと射いく。  
 市いちも鬻ひるどしてつづりふ四し口くちにけられた。かれ清貧せいひん正市せいしうれば  
 鶴翁つるおきなも不便ふびんふおひ。彼かの而已のみを山莊さんさうもあれると免まけられぬ。  
 正市せいし益ひきと鹿かを射い免まと持もつ。家業うちわざのこめふ日ひに夜よの父ちち  
 母ははも告つぐ折せりと鶴翁つるおきなの菴いぢやうに至いたり。むそりに天文てんぶん又またを軍旅ぐんりょのゆ  
 かり頻あまふ求もとむとひくられぬ。けいぬ鶴翁つるおきなの門かど人ひととぞなれりる  
 が。此夜このよと父ちちこの空そらみどりいと打暗うたがれぬ。天文てんぶんの道みちをも学まな  
 ぶやと鶴翁つるおきなが山莊さんさうに至いたりた。庵いぢやうのあつたれば。其所そのところよ此所このところ  
 よと尋たづねらち。後あとも近ちかと東ひがなる山やまの石上いしの上に鶴翁つるおきな獨ひとり天文てんぶん次つぎ  
 うり派は居ゐるこまなれど。爰こゝも至いたりて言葉ことばと發はせんとせしとん。  
 鶴翁つるおきなを只ただ天あまと仰あやむと嘆息げんそくして。先まづの獨言ひとりごとと球たまごぬふ。正市せいし不書ふし

けれど。志こころづくの事こと乃なの同おなれぬとありた。その時とき鶴翁つるおきなしく。  
 汝おれりの間まも爰こゝも至いたりて我われ獨言ひとりごとせぬを笑わら居ゐるれやと尋たづね  
 とば。正市せいしゆへて。今宵このよも浮虚うきそらとれ渡わたりて秋あきのけしひも名な残のこ成なる  
 小師せうし父ちちととも此この風景ふうけいをも詠うたむ。しもの如ごとく教おし誂たとも蒙まり  
 なんと。扱あこそ山莊さんさうもまかりけぬ。主あまと居ゐるまふて火桶ひおけも入いり  
 消残しょうざんれのみめて師父しふといふ。又またへあつたれば。そと爰こゝとなつて  
 宣のたまふて嘆息げんそくする。故ゆゑ扣居ひきゐるなり。將まさ師父しふの先まづは獨日ひとりごと所ところの  
 意いを解げがし願ねがふ。教おしをくれ。某そのが愚おろかな。胸中こもうちゆうの雲霧うんむと晴は  
 められと冀ねがふ。翁おきなしく。茫ぼう々々と天てん機き豫よをうとせり。ひ  
 我われ汝おれは隱言ひそごとを以もつて教おしを。能よ勉めく。自みづかりの意いを知しべし。

共ともは山やま荘しやうよかへり。雲うん箋せんとのびて書かき其その文ぶんよ曰いふ。

刈田かり再また不生なま 田た鳥とり村むら繁さか榮え

此この十じゆ字じ是これ天てん數すうなり。汝なんども自し然ぜん此この句く中ちゆうにわづらふ事ことあるにじと教しやうまれをせう市しいと不ふ審しんとれ中ちゆうぶに願ねがひその詩しをし事こと示ししといふ鶴つる翁おきな回わい文ぶんの時ときいつて分ぶん明めいなるべし。強あきらは同どうするれとて夫つまより世よの中ちゆうに事ことくまぐの物もの語ごは秋あきの夜よのうまぐもたれ。二ふた更げは頃ころおもなりゆれ。市しと父ちち母ははの案あん事じのうへも計かりかじと鶴つる翁おきなは暇ひまを乞こて又また近ちかきに尋たずねしとせんと。我わが家やははしてゆりけしが道みちどがふおもへらく。先まは師しの教しやうも十字じゆうじの内うち小こ吾われも自し然ぜんその句く中ちゆうに預あづかるとわれじとせし何なにゆもせよ天てん數すう

我わが身みも豫あらかめ定さだめ事ことわれをじ。さされ徒いづら年月ねんげつを過とさん。更さらも朽く惜しやくと事ことなれば我われも筋すぢめれ家いへ小こ生せいと事こともかれば賤せんれまはみりあれど。大だい丈じやう夫ふ一いつ度た明めい君きんお仕つかへ名なを後ご世せいに揚あぐ父ふ母ぼと顯あはば是これは過ととれみやゆれとれと。勉つと勵れいの志しを立たしよく。孝かう公こう深ふかく父ふ母ぼ小こ事ことの閑ひまも鶴つる翁おきなの山やま荘しやう小こ通とひ。身み公こう未まだ道みちにまびつれとそ有あり難がたなれ。然しかれ小こ或ある夜よの物もののじつと鶴つる翁おきなの山やま荘しやうより吾わが屋やへ入りつれが山やま崎さきを松まつ柏かしわの枝えだを交まへて。いとりの凄しみく。門かど戸こを守まも護ご大だいの声こゑも遙とほくはへて自おの人ひと里さとの遠とほきを想おもはふ。且かつ。谿たに間まに拈あぶ蝙蝠ふふの形かたちを近ちかく入いへとたながは月つき影かげの傾かたむ。とわし。春はるのどけの景けい物ぶつのくけ腸はらをうごじわらんとおおん。いと感かんも起おこりゆれ折をら。返かへり女むすめの声こゑもていと若わかしげ。助すけけ

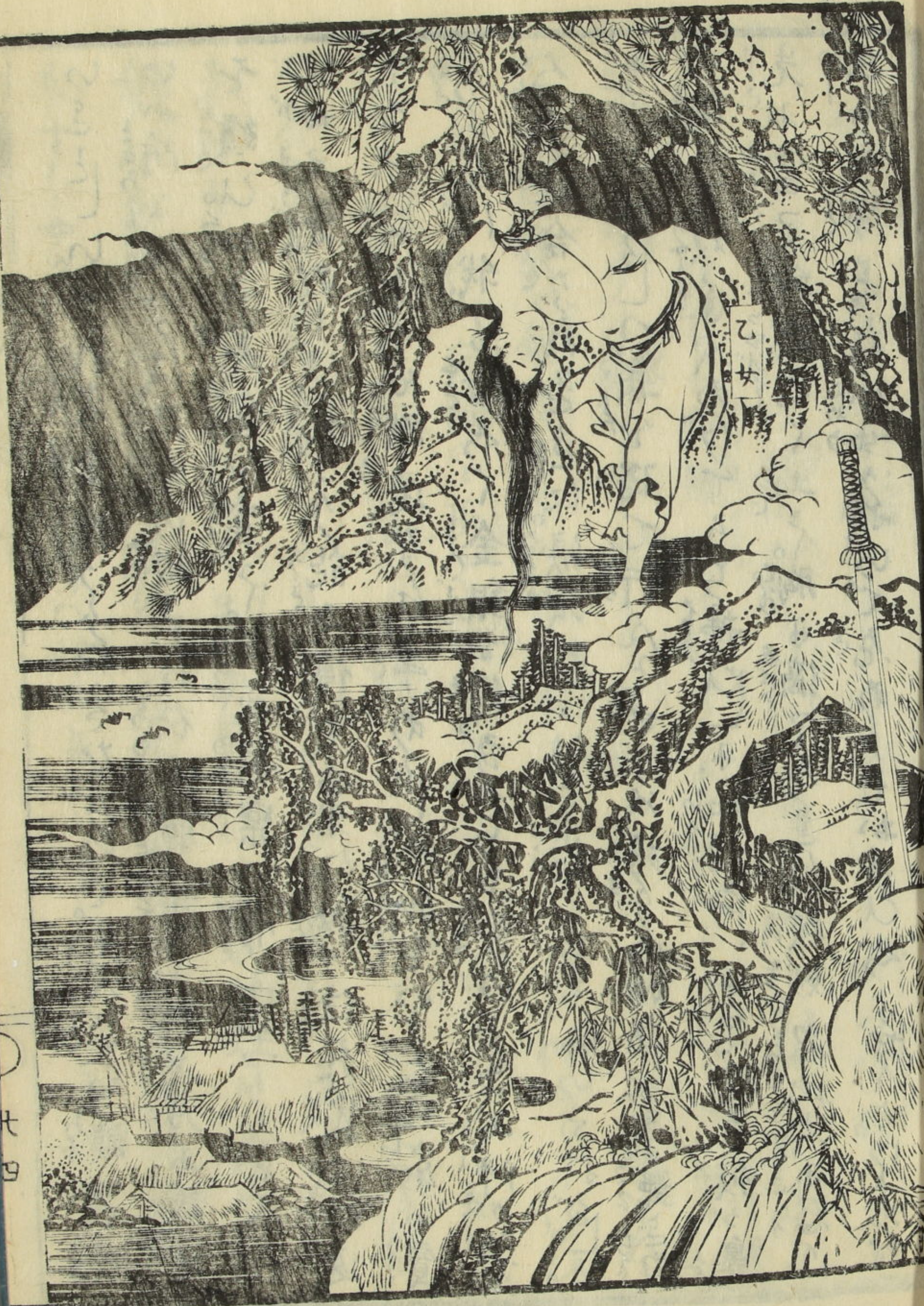
みるなきけまんと泣叫び。西市耳を鳴りて。どことん人々知  
 らぬ声なれが。何れ行へんと。少し道も廻りなれど。声は知  
 縁。小彼方。小多を行む。しよ。近きれ。小隨ひ。我妹。乙女。声と  
 笑われ。益々。驚うれて。飛が。びく。に走り。寄り。寄て。て。あ。は。は。  
 小。情。や。乙女。と。赤。裸。より。て。素。雪。の。と。れ。子。足。は。藤  
 葛。より。て。痛。じ。く。も。高。手。小。手に。あ。り。上。る。山。の。と。好。さ。ま。れ  
 松。の。樹。の。枝。小。引。上。肩。より。胸。の。け。り。と。血。は。母。は。流。く。紅。梅。の  
 香。小。惱。め。れ。風。情。あ。て。ま。れ。緒。も。絶。え。む。と。に。叫。び。居。る。と。  
 西市。涙。雨。の。と。と。如何。と。せん。と。驚。と。けれ。が。か。れ。時。片。小。と。は  
 弱。く。の。叶。じ。と。聲。や。り。ま。く。い。う。乙。女。よ。見。西市。と。愛。ふ。ま。れ  
 我。ぞ。疵。も。治。し。と。え。ゆ。れ。な。れ。と。公。と。怪。し。ま。る。と。さ。し。只。今。救。ひ。取。せ。ん

と。松の枝。小。矢。の。が。て。搦。綱。と。解。ん。と。世。が。此。後。小。解。く。り。と。も。  
 ね。う。と。に。便。を。得。ざ。れ。む。と。や。せん。か。く。や。と。憂。愁。煩。々。を。り。風。と  
 一。の。手。後。に。緒。け。我。帯。と。く。く。と。引。解。き。て。件。の。後。か。づ。に  
 あ。く。と。繫。ぎ。合。せ。松。の。大。枝。小。便。あ。ま。ぐ。く。と。鉤。お。ろ。け。れ。ふ。  
 乙。女。と。今。年。十。四。歳。な。れ。が。疵。と。負。う。れ。入。小。樹。上。小。つ。し  
 上。う。れ。る。苦。痛。小。忍。び。か。み。く。声。を。出。ぬ。後。は。弱。々。て。や。う。く  
 と。地。上。小。お。り。立。し。が。忽。叫。と。一。声。ま。け。び。て。其。ま。う。息。を。絶。お  
 ち。り。西市。と。十。方。に。ら。れ。懷。抱。て。ま。ま。く。小。介。抱。ま。し。と。と。あ。は  
 と。疵。を。え。れ。む。刀。劔。の。疵。も。免。へ。ど。有。合。本。竹。を。以。打。破。し  
 くと。疵。お。て。所。く。皮。肉。を。け。湧。出。れ。血。と。泉。の。ど。く。な。れ。ど。  
 詮。と。べ。な。く。声。小。限。と。名。小。呼。と。更。小。答。の。あ。ら。ば。と。去。

ぞも鳩尾のあつて、微く動さるれど、扱とて死せざる  
 と。あつて近き野中の水に掬て我はより傳へて、乙女が咽  
 母吹込脊かたて摩り、指ささる。公と盡していつかり、ちれが忽  
 然と一息はらして眼をひらけ、たがふ力と得て、ちとまふ、抱  
 るしけし、其の時乙女と苦しげに、正市の顔みくらえて、いふ  
 兄上め、我災難を連れ、今更は是非もなし。そも口惜と次  
 身は語り、せとあつせん。兄上、今宵と山莊よりの帰るも、老  
 お替りて逢さるれば、父上も、案事多し。迎へ行人と、公易  
 けれど、父上、自むいふ、お出さる。御身至孝の、公より、いふ、斗  
 う本意か、くも、おあそらんと、おひかり、おひ、母上、あつ、少しく夜  
 と、籠て、急ぎ、あつ、手業の、あれど、いふ、せんと、竊母、真交、あつ、と

ころ、余所みえ、ちれも、公より、父母、あつ、知れ、せ、は、い、く、せ、と、  
 門の辺、あつ、て、出、く、待、つ、び、い、ふ、あ、つ、り、あ、つ、少、し、も、あ、つ、ハ、此、を、も  
 告進、せ、度、一、つ、あ、つ、案、事、多、し、く、せ、め、い、く、門、の、わ、り、お  
 出、つ、入、つ、して、待、暮、せ、し、ら、お、あ、つ、し、げ、る、れ、鬼、も、人、も、い、ひ、け  
 難、と、大、男、の、案、が、後、より、あ、つ、り、て、水、を、と、刀、を、抜、く、声、と、ま、し、  
 ぞ、一、刀、お、泉、下、の、鬼、と、な、さん、と、言、う、ま、い、く、と、小、服、を、拘、へ、て、  
 飛、り、ご、と、くに、山、路、を、は、して、走、り、行、は、只、個、み、あ、つ、り、て、怖、し、と、  
 云、む、か、り、も、あ、つ、。雲、踏、を、た、ど、れ、公、地、へ、て、此、所、で、あ、つ、し、よ、此、松  
 の、り、と、に、い、く、ハ、あ、つ、して、彼、男、の、し、ら、く、汝、今、我、を、盗、と、捕、  
 と、く、網、の、中、の、臭、囊、の、裏、に、蟲、な、り、殺、さ、も、生、さ、も、我、此、刀  
 の、手、の、内、お、任、め、れ、を、死、ん、と、あ、つ、我、言、葉、を、從、ハ、案、事、か、つ、れ、





乙女



関正市

関正市妹  
乙女  
連

いとしい者命惜うねとかなれど生んみ願ひ我  
 の所は任なは只今の破れ衣も脱捨く朝夕は錦繡  
 を纏ひ口は美食を喰ふ。日夜遊樂の席に至りては將  
 父母兄弟ありは我より能く傳て常に汝が住家へ往返  
 をまじしめ少くも疎遠なれ事ありし今汝をかくとの家不賣  
 ありはば我も少く金銀を得らん今も今の子まふ計くして  
 大の合は合はれざるに涙がわびひく我とも再びおぼしと  
 おどしつとつと毒と將て行んとせし汝の縮りのかきしと艶と力  
 の限りか双に汝わびてうら拂ひし如何なりとて主人彼が鼻  
 先お當り血敷ちく出く胸に滴りたるは彼賊忽地大お怒り  
 出あも劣るれ小女お。して危あむおひとせんと。ワラハ

赤裸なるし。ありらぬ藤かげり汝以く。いゝ搦り松樹の上小  
 引あげて己も松の枝に登り。枝折りて去るか。うらうらと  
 笑ひ。うらひてを打鬪殺しになんせしとろあふ七八丈の大  
 ありと頻りに吼かき跡より獵師などのあはれさまなれ。賊  
 賊と前後を顧足むやに樹を下り。ぶどくと何やらんし  
 ねがら。いつか衣類を取く何所にも形く逃去ちれらし。さ  
 苦く悲しは母聲の限りお叫べど。件の犬えりごとへいれ  
 て見へかりたれが測らども兄上の手に救りれ。達してまう  
 車の上はし。さよ。されども先お胸のありを強くうられね。ハ  
 命なぞくれざるもあふ。よく父母は久あまふ。清身  
 もすくやうに涙をせたまへ。世もくはくへてすくも。さ

陽ひかりりあらしと息いきの間まみく。語かたれえ若わかしげふ。次つぎまよまようを  
 よつりて。命いのち救きうふと盡つめられ。毎い日にち職わざや夜よ半はんに露つゆと消きえ  
 ぬとくあやなすにまう。

田村物語卷之一

陽りあらしと息の間みく。語れえ若しげふ。次まよ  
 よつりて。命救ふと盡められ。毎日職や夜半に露と消  
 ぬとくあやなすにまう。

